九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジュゼップ・エルナンド(バルセロナ大学)著「西欧中世における反イスラーム論 : 極めて困難な相互理解 : ラモン・マルティの事例を中心に(上)」

阿部, 俊大
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授

https://doi.org/10.15017/1470435

出版情報：言語文化論究. 33, pp.149-159, 2014-10-14. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

西欧中世における反イスラーム論：

極めて困難な相互理解――ラモン・マルティの事例を中心に（上）

〔ジュゼップ・エルナンド（バルセロナ大学)〕著

Josep Hernando, “La polèmica antiislàmica i la quasi impossibilitat d’ una entesa”, *Anuario de Estudios Medievales*, 38-2 (2008), pp. 763-791[1].

阿　部　俊　大　訳

要　旨

ペトルス・ヴェネラビリスは、1142年から43年にかけてのイベリア半島への旅に際し、ムハンマドの生涯と教説についての既知のテクストをラテン語に翻訳する着想を得た。イスラームをより巧妙に論駁するための情報を得ることがその目的である。13世紀後半には、フランシスコ会とドミニコ会が主導する伝道・改宗の運動が生じ、「言語研究所 *Studia Linguarum*」と呼ばれる研究施設が設けられた。同じ頃、ラモン・マルティ（1230-1284/85）は、反イスラーム論について述べた第一部（『ムハンマドの宗派の形成・拡大とその四つの劫罰について *De origine et progressu et fine Machometi et quadruplici reprobatione eius*』、別名『ムハンマドの宗派について *De Secta Machometi*』）と、キリスト教信仰を説明した第二部『使徒信経要綱 *Explanatio Simboli Apostolorum*』から成る著作を著した。このラモン・マルティの著作は反イスラーム文学のジャンルに決定的な影響を及ぼし、他の著作に着想を与え、また単純に剽窃（もしくは作者への言及がまったくない引用）の対象となっている。第一部、第二部は、それぞれ独立した形態で現在まで伝来している。

キーワード

ムハンマド、イスラーム論駁、改宗・伝道運動、言語研究所 *Studia Linguarum*, ラモン・マルティ（1230-84/85)、反イスラーム、キリスト教信仰の説明

1．反イスラーム論の先例：『トレドまたはクリュニー集成』

キリスト教――イスラーム論、或いはイスラーム――キリスト教論は、東方では、イスラームがビザンツ帝国のキリスト教住民とコンタクトを持ち始めると同時に現れた[2]。その一方、西方では、クリュニー修道院院長ペトルス・ヴェネラビリス（1092-1156）以前には、そのテーマに関連した試みはほとんど反響を呼ばず、影響はごく乏しかった[3]。

西方におけるキリスト教――イスラーム論の最初にして決定的な一歩は、ペトルスが、ベネディクト系修道院の訪問と視察を目的にイベリア半島への旅を思い立った時に生じた。ペトルスは、「レコンキスタ」の活動による〔神学的議論の不在についての〕楽観的傾向を目の当たりにし、また、「不信心者」の文化に基づく著述に魅了され、それらを学習する者たちが存在することに気が付い

た。彼は、西方のキリスト教徒がイスラーム、またイスラーム教徒の精神を構成するものを無視してきたことを自覚し、知的な十字軍活動の基礎となる護教論を構築するために、それらを研究しなければならないと決意した。つまり、彼の考えでは、まずもってイスラームの信者、追随者を理解しなければならず、そのためには、彼らの教説の基礎とみなされ、彼らの歴史を説明しているテクスト群を、キリスト教神学者の手中に収めねばならないのである。このため、ペトルスはコーラン（クルアーン）のラテン語訳を指示した後、『サラセン人の宗派あるいは異端に対する書 *Liber contra sectam sive haeresim Saracenorum*』[4] を著し、著述によって論駁する必要があったとして、コーランを翻訳することを正当化している[5]。

このために協力者たちが集まり、翻訳チームを形成した。その中には翻訳の正確さを保証するためのイスラーム教徒の存在も見られた[6]。著名なメンバーたちは以下の通りである。ポワティエのピエールは、優れた文学的・神学的素養を備えていた。トレドのペドロは、ラテン語はあまり出来なかったが、アラビア語を知っていた。チェスターのロバートと、カリンティアのヘルマンは、科学の領域で優れた学識を有していた。イスラーム教徒のムハンマドは、翻訳の信頼性を保証する役割を担っていた[7]。

このプロジェクトの成果は、イスラームに関連する著作の一連の翻訳であり、その総体は『トレド集成』*Corpus Toletanum* または『クリュニー集成』*Cluniacense* と呼ばれる。その中でも、後世への影響という点では ── 尊者ペトルス自身が行ったように ── チェスターのロバートの作品である、コーランのラテン語訳を挙げるべきであろう。 ある部分では説明的であり、また、他の部分ではコーランのテクストを要約しているが、しかし常に偏向的な訳である。この訳は、ほとんどのキリスト教徒の論客に、ルネサンスに至るまで、そして特により後の時代にも、利用された[8]。テクスト群の内の、論の基礎となる部分を構成する基本的な著作の一つが、バグダード〔アッバース朝〕のカリフ、アル・マームーン（786-833）の宮廷の成員であったアブド・アル・マシフ・イブン・イサーク・アル・キンディについて、11世紀以降に書かれた『アル・キンディの預言 *Risala d'Al-Kindi*』である[9]。『アル・キンディの弁明 *Apologia d'Al-Kindi*』の名でも知られているこの本で扱われているテーマは、古典的な反イスラーム論のそれである。キリスト教の聖書の完全性の擁護。三位一体の教義の擁護。性と暴力に関するムハンマドの堕落に対する激しい攻撃。イスラームの教説や慣行、特にジハード、もしくは「聖なる戦争」についても批判的である[10]。『トレドまたはクリュニー集成』を構成する他の作品として、『サラセン人に対して大きな権威を持つ、ムハンマドの教説について *De doctrina Machumeti quae apud sarracenos magnae auctoritatis est*』がある。これは対話形式で書かれ、ムハンマドの生涯についての情報源となるものであり、カリンティアのヘルマンによって、アラビア語から翻訳された。極めて大部で詳細な、『ムハンマドの誕生と成長について *De generatione Machumeti et nutritura eius*』のタイトルを持つムハンマドの伝記の翻訳も彼による。チェスターのロバートは、ムハンマドとその追随者の生涯の簡潔な要約である『サラセン人たちの誤った笑うべき年代記 *Chronica mendosa et ridiculosa sarracenorum*』を著した。

反イスラーム論の基礎文献の一つである『ムハンマドの天国訪問の書 *el Liber Schalae Machometi* (*Kitab al-Mihray*)』は、議論の前提となるテクスト群収集の更なる前進を示す著作である。ムハンマドの夜間の天への旅を扱ったものであり、天国を詳細に描写し、その影響力は大きなものであった[11]。また、モーセ・セファルディの名を持つ改宗ユダヤ人ペドロ・アルフォンソ（1062－1140）の『対話篇』の第五の対話、イスラームについての対話も、西洋におけるイスラームについての知識の集積に貢献した[12]。

ロドリゴ・ヒメネス・デ・ラダ（1170／80－1243）は、科学的な精神に基づいて、過去像を形成

する上での複数の新しく興味深い内容を記した『アラブ人の歴史 *Historia Arabum*』の著者であるが、彼の主導下でも、反イスラーム論の動きが生じた。その最も重要なメンバーは、マルコス・デ・トレドである。彼はコーランの[13]、また、イブン・トゥーマルト（1077－1130）の『信仰箇条 *Aqida*』── ラテン語に訳された最初のイスラーム神学書 ──[14]、更にある改宗イスラーム教徒の著作である『イスラーム法の精通者による論駁 *Contrarietas Alfolica*』の翻訳を行った[15]。これらの著作は中世にはあまり知られておらず、キリスト教徒の論者に対する彼の影響力は小さかった。『トレド集成』に含まれる著作群がより好まれていた[16]。

2．言語研究所 *Studia Linguarum* とドミニコ会・フランシスコ会の伝道活動

13世紀後半、フランシスコ会とドミニコ会の指導の下に、改宗と伝道の活動が生じると、アラビア語とその他の言語、またイスラームの著作を学ぶことを目的とした言語研究所 *Studia Linguarum* と呼ばれる研究施設が創設された。地中海を中心とし、キリスト教徒・イスラーム教徒・ユダヤ教徒から成る世界では、物質的にも文化的にも彼らの相互関係は密であり、思想家たちは、より意識的に、相手の言語についての知識、イスラーム世界に関して言えば、アラビア語と彼らの文化遺産である基本的なテクスト群についての知識が不可欠であると考えたのである。そこではドミニコ会が主導的な役割を果たし、カタルーニャ圏では３人のドミニコ会士が中心となった[17]。言語研究所の創設者であるラモン・ダ・ペニャフォルト[18]。バルセロナでヘブライ語学校 *Studium haebraicum* を運営したラモン・マルティ[19]。そしてバレンシアでアラビア語学校 *Studium arabicum* を運営したジュアン・ダ・ピュッチサルコスである[20]。アラビア語、ヘブライ語、その他のセム系言語、その語彙・文法や、宗教・哲学・神学のテクストが学習された。修道士たちが伝道者として送られる場所での諸問題を知るのがその目的であった。無論、言語研究所は（ラモン・マルティの例を除いて）科学的な事業を目的としていたわけではなかったが、異なる（特に、対立する）信仰を持つ者たちとの平和的コンタクト ── 説得のために公の場での論議を行うこと ── の必要性について、関心を喚起する結果をもたらしたであろう。

ラモン・ダ・ペニャフォルトの忠実な追随者であるラモン・マルティ（1230-1284/85）が、イスラーム教徒やユダヤ教徒の間で働く伝道師や説教師を養成するための一連の著作の執筆を担当した[21]。彼の活動は二つの時期に分けられる。第一期ではアラブに重点が置かれ、第二期にははっきりとユダヤに重点が置かれている[22]。第一期である1254年頃に編纂されたある著作は、二つの部分に分かれ、それぞれが２つの独立した作品であるかのように分かれて伝来している。最初の部分は、『ムハンマドの宗派について *De secta Machometi*』というタイトルで、明白に反イスラームの性格を持っている[23]。他方は、キリスト教信仰を語ったものであり、『使徒信経要綱 *Explanatio Simboli Apostolorum*』の名で伝来している[24]。彼は、ムハンマドは偽りの預言者であるとして、イスラーム信仰の誤りを確認する。そしてキリスト教信仰を述べる著作の完全性を論証し、それ故にそれらは偽りではなく、キリスト教信仰が真実であると示していることを、認めなければならないとする。これが『使徒信経の説明』というタイトルを冠した、作品の第二部の中身である。反イスラームの部分と、キリスト教信仰の表明の部分からなるこの作品の重要性は、反イスラーム文学のジャンルに決定的な影響を及ぼし、他の著作に着想を与え、また単純に剽窃や、（作者への言及がまったくない）引用の対象となっている[25]。

このように、この著作は中世を通じ、伝道師や説教師（その多くはドミニコ修道会士）によって、改宗活動のためにイスラーム信仰を持つ者と対話する際に、利用されていた[26]。反イスラーム論の

性格を持つこの作品の第一部は、中身は同一でも様々なタイトルで知られており、ラモン・マルティはたくさんの反イスラームの著作を書いたのだと信じる人がいるほどである[27]。様々な手稿文書（ヴァティカンのドミニコ会文書館やケンブリッジ大学、ソリアのエル・ブルゴ・デ・オスマ司教座文書館）におけるものや、特に16世紀の、活版版におけるもの、歴史的なものなど、この作品の様々なタイトルというのは以下の通りである。『サラセン人に対して *Contra Sarracenos*』、『反ムハンマド考 *Tractatus contra Machometum*』、『反コーラン摘要 *Summa contra el Coran*』、『ムハンマドの宗派の形成・拡大とその四つの劫罰について』、そして最後に、『ムハンマドの宗派について』[28]。

フランシスコ会とその創設者アッシジのフランチェスコにとっても、伝道は最も重要な事業であった[29]。この事業を追求したのがラモン・リュイ（1235-1316）である。彼にとっては不信心者の、すなわちイスラーム教徒の改宗は、知的かつ重要なプロジェクト ── 正確にはプロジェクトであるとともに（個人的な）野心 ── であった[30]。この姿勢の成果が、1307年に書かれた『サラセン人、また聖なる三位一体とキリストの誕生を否定する全ての者に対する、カトリック信仰の議論 *Diputatio de fide catholica contra sarracenos et contra quoscumque negantes beatissimam Trinitatem et incarnationem*』というタイトルでも知られる、『キリスト教徒ライムンドゥスとサラセン人ハマルの議論 *Diputatio Raymundi Christiani et Hamar Saraceni*』である[31]。ラモン・リュイの方法論はよく知られている。全てを、とりわけ三位一体の秘蹟を、論理的に説明することである。彼は、イスラームに対する同時代の偏見を克服は出来なかったにせよ、コーランの文章的な美しさの熱心な崇拝者であった[32]。

13世紀末のフィデンツィオ・ダ・パドヴァもフランシスコ会士であった。彼は、部分的に自己の中東への旅を基にした、『聖地回復の書』の著者である[33]。その著作において、1291年の大敗北の後、聖地奪回のためのプロジェクトを記している[34]。

リコルド・デ・モンテクローチェ（1243頃-1320）は、ドミニコ会士で、中東への伝道師であり、『反イスラーム法 *Contra legem Saracenorum*』の名でも知られている著作、『コーラン論駁 *Confutatio Alcorani*』を著した[35]。そこでは、『トレド集成』に含まれる著作群の内容以上の、イスラームについての情報が示されている。（それらの情報は）ボニファティウス８世に命じられた宣教事業のために旅した、オリエントのイスラーム地域（聖地、シリア、パレスティナ、バグダッド）の情報において貴重な価値を持つ作品である、『巡礼の書 *Liber peregrinationis*』において見て取れるように、自らの旅の間に得た、直接の体験の成果である。

聖地における西欧の支配の消滅と新しい環境は、現実的な関心や十字軍計画の熱意を低下させ、イスラーム教徒や異教徒に対する布教活動において、新しいアイデアや方法が現れた。興味深い事例がギレム・ダ・トリポリ（13－14世紀）である。彼は『サラセン人の立場についての論考 *Tractatus de statu sarracenorum*』という著作を著したが、イスラーム世界の肯定的な紹介だけでなく、キリスト教神学の構造をも示した、その全面的な反十字軍の姿勢は興味深い[36]。

３．トルコの脅威と「論争と対話」の道

コンスタンティノープルがトルコの手に落ちるまでは、カタルーニャ語のものも含む、幾点かのコーランの翻訳があるだけだった[37]。この時から、反イスラーム論が復活したが、対話の道も探求された。サラマンカの教師であり、バーゼル公会議に出席したフアン・デ・セゴビア（1400－1458）がその例である。その晩年、彼はイスラーム教徒とキリスト教徒の論争に新しい道を開こうとした。すなわち、対話の道である。序文しか伝わっていないが、彼は高名な法学者であるシサ・デ・ヤビールの助けを得て、コーランのカスティーリャ語・ラテン語の二言語訳を行っている[38]。とはいえ、こ

の著作家の性格は、ニコラウス・クザーヌスその他の人々に宛てた書簡群における、平和的な方法“平和と学識の道によって per viam pacis et doctrine”の説明に非常によく現れている。彼はそれまでにとられていた方法論を学習し、キリスト教徒の説教師たちがムハンマドの宗派のことを知らず、コーランに見出すことのない教説をイスラーム教徒のものだと考えていたことを指摘している。「こうして」と彼は言う。「イスラーム教徒に対する嘲りや軽蔑が生じたのである。とりわけ、公衆の面前での説教や私的な議論において、不正確に彼らの法を引用し、彼らが預言者たちの最高なる者としているムハンマドを嫌悪し、ののしるようになったのだ」。彼は、対話の方法は、イスラームに対するより現実的な知識に基づかねばならないとしている。とはいえ、彼もまた、イスラームに対して余りにも党派的な立場から、すなわち、キリスト教徒でスコラ学者という立場からイスラームに対抗するという過ちに陥っている。

（※対話の道に対し）論争の道を引き継いだのは、アルフォンソ・デ・エスピーナ（1469年没）である。彼が1459年に著した『信仰の砦 *Fortalitium fidei*』は、1469年に出版された[39]。そこでは２つの反駁 ── 対ユダヤ人と対イスラーム教徒 ── が語られる。イスラーム党派に対する反駁は、見ればわかるように、〔後述の〕フアン・デ・トルケマーダが行ったものより完全なものだが、同じ論点に触れ、同じ構造を持っている。また、ラモン・マルティの路線に従っている。おそらくエスピーナのオリジナリティは、歴史を扱った大部な部分にある。そこでは「ムハンマドの時代から現在までの、肉体を用いた戦闘におけるサラセン人とキリスト教徒の戦いと勝利、および157の戦いの詳述」が扱われている。最後の章は以下のようなタイトルになっている。「12番目にして最後の考察：四段階で行われるサラセン人の法の終わりと、キリスト教徒の支配下への彼らの永遠の従属についての論考」。この著者には、当時のスペインの複数の論者たちに共通する、（※グラナダ王国攻略が目前に迫り、「レコンキスタ」が完成しつつあった時期の）勝利の意識が感じられる。

論争路線の仮借なき信奉者、枢機卿フアン・デ・トルケマーダ（1388－1468）は、改宗ユダヤ人家系出身で、ドミニコ会士であり、特に教会神学において、15世紀最高の神学者であると見なされている。彼は1459年に『不実なムハンマドの主要な誤りについての論考 *Tractatus contra principals errors perfidi Machometi*』（※以下、『論考』）を著した[40]。彼は西方キリスト教会の激動の時代を生きた。すなわち1417年までの教会大分裂、公会議主義、コンスタンツ公会議（1411－1418）の時代であり、バーゼル公会議ではドミニコ会代表であった。トルコの勢力拡大の情勢が彼を動かし、キリスト教圏の君主たちの気持ちを動かしてトルコの危機に対する十字軍に団結させる意図を持って『論考』を書かせたのである。『論考』を書いたときには、メフメット２世はコンスタンティノープルを攻略し、ベオグラードにまで迫っていた（1456）。教皇ピウス２世（1458-1464）は、メフメット２世に対する十字軍へのキリスト教圏の団結を模索して、マントヴァでの会議（1459）を組織したが、トルケマーダもそれに参加し、自著である『論考』を用いて、キリスト教の撲滅を求めるムハンマドの誤った法が、イスラームとの共存の可能性を無にさせているのだと主張した。すなわち「対話は無益かつ不可能である」と。それゆえ「唯一の解決策は戦争にのみ求められる」と。枢機卿トルケマーダは、この書物を、キリスト教の君主たちをしてトルコの危機に対する十字軍を形成せしめる、という目的で著した。同書においてトルケマーダは、ムハンマドの偽預言者としての本性と、イスラームの主要な誤り（40の誤り）とイスラームに対するキリスト教の優越性（ムハンマドの党派に対するキリスト教の12の優越）の弁護を、イスラームの拡大主義の背景を説明しながら叙述している。このように語った後、トルケマーダは、トルコの脅威に対しては、キリスト教圏あるいはヨーロッパから彼らを追い払うため、キリスト教徒が団結して武器を取る道しか残されていないとする。彼の典拠は聖書、教父たちの著作、キリスト教徒による著作、ギリシア・ローマの異教徒に

よる著作、『トレド集成』（コーランの引用はチェスターのロバートの訳からのもの）、またラモン・マルティの『ムハンマドの宗派について』もしくは『四つの劫罰』*Quadruplex reprobatio* である。『論争』においてトルケマーダは、彼の神学者としての優秀さと、論争家としての品性の低さを示している。

トルケマーダ枢機卿の『論考』は、彼の友人である枢機卿ニコラウス・クザーヌス（1401 ── 1464）にインスピレーションを与えた。クザーヌスは1461年に『コーラン検証 *Cribatio Alcorani*』を著した[41]。この作品で彼は、コーランに書かれていることを排斥している。「ムハンマドは神の声を聞いたと言っているが、自分自身の声を聞いたのだ」。実際のところ、『コーラン検証』は、よくある反イスラーム論の一つに過ぎない[42]。優れているのは、トルコの脅威の故に同時代の複数の反イスラーム著作に ── 特に彼の友人トルケマーダの『論考』に ── 現れていた態度を排除し、対話の方法に回帰しようという作者の意図である。

当時の著述家の中でもっとも興味深い人物の一人が、バレンシアのチャティバに生まれたフアン・デ・アンドレスである。父親のアブダラー Abdallah と同じく、彼もイスラーム法学者だった。1487年、かつての自分と同じ信仰を持っていた者たちを改宗させる任務に尽力しようという信念のもとに、キリスト教に改宗した。彼は聖職者としての訓練を受け、ますバレンシアで、ついでグラナダで、さらにサラゴサで伝道者として活動した。コーランと、ムハンマドの慣行 sunna についての６点の書物をアラビア語から翻訳した。また、自己の翻訳書群の要約として、『「ムハンマドの宗派とコーランの混乱」と題する書 *Libro que se llama confusión de la secta mahometana y del Alcorán*』を著した。1515年にバレンシアで初版が発行されたこの本は、様々な言語に翻訳されつつ、広く普及した。

注

1 この論考は、ルセル・サリクル・イ・ユック博士を代表とし、スペインの科学刷新省が助成する研究プログラム「中世地中海におけるアラゴン連合王国：文化の懸け橋、キリスト教世界とイスラームの仲介者」（Ref. HUM2007-61131）の成果の一部である。また、マリア・テレサ・フェレル・イ・マリョルを代表とする研究強化グループ「カタルーニャ＝アラゴン連合王国・イスラーム・地中海世界」（Ref. 2005 SGR00193）を通じ、カタルーニャ州政府による総合的学術研究支援活動の成果の一部でもある。

2 A. Th. Khoury, *Les théologiens byzantins et l'Islam. Textes et auteurs*（*VIIIs-XIIIs*）, Louvain – Paris, Ed. Nauwerlaerts, 1969; A. Ducellier, *Chrétiens d'Orient et Islam au Moyen Age VIIe-XVe siècle*, Paris, Ed. Armand Colin, 1996を参照。

3 L. F. González Muñoz, "En torno a la orientación de la polémica antimusulmana en los textos latinos de los mozárabes del siglo IX", *¿Existe una identidad mozárabe? Historia, lengua y cultura*（*ss. IX-XII*）*: Coloquio organizado por la Casa de Velázquez y la Escuela de Estudios Árabes*（*CSIC, Granada*）, *y celebrado en Madrid, 16-17 de junio de 2003* を参照。また、A. Ballestín Serrano, "El conocimiento del Corán entre los mozárabes del siglo IX", M. Dominguez García et alii（eds.）, *Sub luce calami florentis. Homenaje a Manuel Díaz y Díaz*, Universidad de Santiago de Compostela, 2002, pp. 390-409を参照。

4 J. P. Migne, *Patrologia Latina*（以下、PL）, vol. 189, París, 1854, cols. 663-720.

5 「それゆえムハンマドが誤って異端の名によって貶められるにせよ、異教徒であると非難されるにせよ、議論によってではなく、著述によるべきである」"Sive ergo Mahumeticus error heretico nomine deturpetur, sive gentili aut pagano infametur, agendum contra eum non est, escribendum est",

Prologus, col. 671, n. 15.

6 ペトルス・ヴェネラビリスの書簡集成は、この計画についての直接かつ基本的な史料である。*PL*, vol. 189を参照。また、M. Th. Alberny, "Deux traductions latines du Coran", *Archives d'Histoire Doctrinale et Litteraire du Moyen Age*, 48 (1947), pp. 69-131; J. Kritzech, *Peter the Venerable and Islam*, Princenton, New Jersey, 1964; J. Muñoz Sendino, "La apología del Cristianismo de al-Kindi", *Miscellanea Comillensis*, 11-12 (1949), pp. 400 ss. を参照。ペトルスをこの目標に導いた理由は、教会の最初の数世紀に、教父たちが異端者たちに対して行った議論の中に見出すことが出来る。J. Martínez Gásquez, "Los Santos Padres, modelo de Pedro el Venerable en la refutación del Islam", *Cuadernos de Filología Clásica. Estudios latinos*, 15 (1998), pp. 347-361を参照。

7 ペトルス・ヴェネラビリスは、『イスラームの宗派あるいは異端に対する書』において以下のように述べている。「それゆえ私のもとに、この世界の半分以上を汚染した致命的な毒をもたらすところの、アラブの言語の熟練者を集めた。彼らに、コーランと呼ばれる、堕落した人物の生まれ・生涯・教説・法を、アラビア語からラテン語に翻訳するよう、説得した。そして翻訳がまったき信頼を持つように、また如何なる虚偽もが我々の知識から取り除かれるように、キリスト教徒の翻訳者たちに同様にサラセン人を参加させた。キリスト教徒の翻訳者たちの名は、チェスターのロバート、カリンティアのヘルマン、トレドのペドロであり、サラセン人はムハンマドという名であった。これらの関係緊密な異国人たちが書庫を入念に調べ、少なからぬ書物が、先述の作品群から、ラテン語の読者たちのために出版された」"Contuli ergo me ad peritos linguae arabicae, ex qua procedens mortiferum virus orbem plusquam dimidium infecit. Eis ad transferendum de lingua arabica in latinam perditi hominis originem, vitam, doctrinam, legemque ipsamque Alchoran vocatur tam prece quam pretio persuasi. Et ut translationi fides plenissima non deesset, nec quicquam fraude aliqua nostrorum notitia subtrahi posset, christianis interpretibus etiam sarracenum adiunxi. Christianorum interpretum nomina, Robertus Ketenensis, Armannus Dalmata, Petrus Toletanus, sarraceni Mahumeth nomen erat. Qui intima ipsa barbara gentis armaria perscrutantes, volumen non parvum ex praedicta materia latinis lectoribus ediderunt".

8 O. de la Cruz Palma, *La Trascendencia de la Primera Traducción del Corán* (Robert de Ketton, 1142), Universitat Autònoma de Barcelona (http://www.hottopos.com/collat7-/oscar.htm); J. Martínez Gázquez, "Finalidad de la primera traducción del Corán", M. Barceló and others, *Musulmanes y cristianos en Hispania durante las conquistas de los siglos XII y XIII*, Universitat Autònoma de Barcelona, 2005, pp. 71-78を参照。

9 この作品は『アル・キンディの弁明 *Apologia d' Al-Kindi*』としても知られており、実際には、作者不詳である。2つの部分で構成されており、第一部『その宗派にキリスト教徒をいざなうためのサラセン人の書簡 *Epistola sarraceni ad suam sectam christianum invitantis*』は、キリスト教徒に対するイスラームへの帰依の呼び掛けである。第二部『彼らの法は理性的でないとする、モーロ人へのキリスト教徒の返書 *Rescriptum christiani ad maurum suam legem nichil esse merito rationis ostendentis*』は、キリスト教徒による返答である。*L' Apologia* はJ. ムニョス・センディーノによって刊行されている。J. Muñoz Sendino, "La apología del Cristianismo de al-Kindi", *Miscellanea Comillensis*, 11-12 (1949), pp. 337-460; F. González Muñoz, "La versión latina de la "Apología de al-Kindi" y su tradición textual", M. Barceló et alii (eds.), *Musulmanes y cristianos,* cit., pp. 25-40.

10 『アル・キンディの弁明』は、事実と、それについて議論することとの相違をよく示す好例であ

る。この性質のため、同書は西欧においてイスラームについての情報源の一つとなるに至った。その翻訳者は、トレドのペドロであった。さらに、同書の（批判するべき価値を持たない）要約も作成された。

11 同じくよく知られているように、ムハンマドの天国訪問は、ダンテにも決定的な影響を与えている。J. Muñoz Sendino, *La Escala de Mahoma*, Madrid, Ministerio de Asuntos Exteriores, 1949; E. Cerulli, *Il "Libro della Scala" e la questione delle fonti arabo-spagnole della "Divina Commedia"*, Città del Vaticano, Biblioteca Apostolica Vaticana, 1949; M. Asín Palacios, *La escatología musulmana en la Divina Comedia*, Madrid, 1984を参照。

12 "El Islam en los *Dialogi* de Pedro Alfonso", *Revista Española de Filosofía Medieval*, 10（2003）, pp. 59-66を参照。完全なテクストは、K.-P. Mieth, J.V. Tolan（eds.）, *Pedro Alfonso. Diálogo contra los judíos*, Huesca, Instituto de Estudios Altoaargoneses, 1999に収められている。

13 N. Petrus i Pons, Marcos de Toledo y la segunda traducción latina del Corán, M. Barcelo et alii（eds.）, *Musulmanes y cristianos*, cit., pp. 87-94; J. Tolan, *Las traducciones y la ideología de reconquista: Marcos de Toledo*, ib., pp. 79-86. を参照。

14 M. Th. D' Alverny, "Marc de Toledo, traducteur d' Ibn Turmat", *Al-Andalus*, 16（1951）, pp. 99-140, 259-307を参照。この論考を含む、本稿の検討対象を多様な側面から扱ったアルヴェルニーの論考群は、M. Th. D' Alverny, *La connaissance de l'Islam dans l'Occident médiéval*, Variorum Reprints, 1994に収められている。

15 Th. Burman, "The influence of the Apology of Al-Kindi and *Contrarietas Alfolica* on Ramon Llull' s late religious polemics, 1305-1313", *Mediaeval Studies*, 53（1991）, pp. 197-228. *Contrarietas Alfolica* は、ms. 3394, Paris, BNF, fols. 237v-263v より参照できる。未だ校訂版は存在しない。

16 N. Daniel, *Islam and de West. The Making on an image*, Oxford, 19932; N. Daniel, Spanich Christian Sources of Information about Islam（Ninth-Thirteenth centuries）, *al-Qantara*, 15（1994）, pp. 365-384. を参照。

17 創設者のドミンゴ・デ・グスマン自身が望んでいたように、宣教がこの修道会の主要な目的であり、学問の基本にもそれがあったことを忘れてはならない。中世のイベリア半島には〔※外国語の学習や翻訳について〕先行する複数の事例があり（西方における文化の中心であったトレド：司教ロドリゴ・ヒメネス・デ・ラダの事績：セビーリャ大学にアラビア語講座を設置したアルフォンソ10世、etc.）、また早くも10世紀のリポイ修道院、11世紀からのビック司教座、12世紀からのタラゴーナや、またバルセロナといった文化的中心地とアラビア文化圏の接触があったことから、なぜカタルーニャに *Studia Linguarum* が生じたかを理解することができる。

18 A. Cortabarría Beitia, "San Ramón de Penyafort y las escuelas dominicanas de lenguas", *Estudios del Vedat*, 7（1977）, pp. 125-154. を参照。

19 A. Berthier, "Un maître orientaliste du XIII^{e} siècle, Raymond Martin, O.P.", *Archivum Fratrum Praedicatorum*, 6（1963）, pp. 267-311; L. Robles, *Fray Ramón Martí de Subirats, O.P, y el diálogo misional en el siglo XII*, Caleruega（Burgos）, OPE, 1986.

20 言語研究所の第一段階は、ラモン・ダ・ペニャフォルトによる創設から彼の死までである。第二段階は1275年から1313年にかけてで、バルセロナではジュアン・マルティ、バレンシアではジュアン・ダ・ピュッチサルコスが中心あった。A. Cortabarria Beitia, "L' étude des langues au Moyen Age chez les Dominicains: Espagne, Orient, Raymond Martin", *Mélanges de l'Institut Dominicaine des Études Orientales du Caire*, 10（1970）, pp. 189-248; U. Monteret de Villard, *Lo*

studio dell'Islam in Europa, Città del Vaticano, Biblioteca Apostolica Vaticana, 1961を参照。

21 ラモン・マルティは1230年頃、バルセロナ近郊のスビラッツ Subirats で生まれた。サンタ・カテリーナ修道院においてドミニコ会士となり、50年以上在籍した。多くのドミニコ会士や他の修道会士のように、パリで学び、そこで個人的にアルベルトゥス・マグヌスと知り合った。1238年から1240年にかけ、ドミニコ会総長であったラモン・ダ・ペニャフォルトは、彼を言語研究所に配した。1250年、トレド管区指導部は、アラビア語とイスラーム文化を学ぶよう、彼をチュニスのアラビア語学校に向かわせた。1268年、国王ジャウマ１世は、彼をユダヤの書物を分析する組織のメンバーに指名した。チュニスへの旅行後、晩年をバルセロナで過ごし、ヘブライ語学校を運営した。1284年か1285年に死去した。

22 我々が彼の生涯について知るところは多くなく、年代も不確かではあるが、その作品を注視し、分析するならば、知的な観点から見たラモン・マルティの人物像――「ヨーロッパにおける最初の東洋学者」（ウグ・ムンテラッ・ダ・ビリャルド Hug Monteret de Villard）、「言語研究所の頭脳」（A. クルタバリア A. Cortabarria）―― は巨大である。1254年には、説教師が用いるための同一作品の二つの部分である、基本的に反イスラームの性格の『ムハンマドの宗派について』と、使徒信経について記した『使徒信経要綱』を著した。1267年には、ドミニコ会の修道士たちがユダヤ人との関係において用いるように、ユダヤ人についての論争的性格の作品である『ユダヤ人のくびき *Capistrum iudeorum*』を著した。 しかし、最も有名な彼の著作は、1278年に書かれた有名な、古い手稿文書で言う『ユダヤ人に対する信仰の議論 *Pugio fidei contra Iudeos*』、印刷された版で言うところの『モーロ人とユダヤ人に対する信仰の議論 *Pugio Fidei adversus Mauros et Iudaeos*』である。年代不詳のラテン語―― アラビア語・アラビア語 ―― ラテン語の辞書である『アラビア語語彙集』の作成にも貢献した。『哲学者たちの誤りについて *De erroribus philosophorum*』という略称でも知られる、『哲学者たちの誤りについての論考：アリストテレス、アヴィセンナ、アル・ガザーリー、アル・キンディとモーセ *Tractatus de erroribus philosophorum, Aristotelis, Avicennae, Algazelis, Alkindi et Rabbi Moysis*』も著した。

23 J. Hernando, "*Ramon Martí. De Secta Machometi o De origine, progressu et fine Machometi et quadruplici reprobatione prophetiae eius*. Introducción, transcripción, traducción y notas por Josep Hernando", *Acta Historica et Archaeologica Mediaevalia*, 4 (1983), pp. 9-63を参照。

24 J. M. March, "En Ramon Martí i la seva "Explanatio Simboli Apostolorum"", *Anuari de l' Institut d' Estudis Catalans*, 1908, p. 481を参照。

25 例えばバルセロナ司教マルティン・ガルシア（1512-1521）は、反イスラームのテーマについての説教の多くで、ラモン・マルティの反イスラーム主義の著作を、彼の名を挙げることなく、ほぼそのまま利用している。J. Ribera Florit, *Polémica cristiano-musulmana en los sermons del Maestro Inquisidor Don Martin García*, Barcelona, 1967 (Tesi de llicenciatura) を参照。ラモン・マルティの『ムハンマドの宗派について』の剽窃は、ペラ・パスクアル（バレンシア、1227頃 ―― グラナダ、1300）のものと伝えられる反イスラームの著作に見出される。彼はモサラベ家系出身で、バレンシアの司教座聖堂参事会員であり、商人であり、ハエンの司教であって、グラナダのイスラーム勢力の虜囚となり、処刑された。彼は反ユダヤ論の著作『カトリック信仰についてのユダヤ人に対するハエン司教の議論 *Disputa del bisbe de Jaén contra els jueus sobre la fe catòlica*』や、反イスラーム論の著作『ムハンマドの宗派についての反駁 *Impugnacio de la secta de Mahoma*』も著している。この作品において、先に述べたように、他の作家たちと並んで、ラモン・マルティの『ムハンマドの党派について』の剽窃がある。Jaume Riera i Sans, "La invencio

literaria de Sant Pere Pasqual", *Caplletra, Revista de Filologia*, 1 (1986), pp. 45-60を参照。

26 ユダヤ人やイスラーム教徒に説教をするには、まず彼らに、彼らの過ちを指摘し、キリスト教信仰の内容を聴き、受け入れるよう説得することを目的とした、説教師たちの言うことを聴かせる「権限」が必要であった。ジャウマ・リエラによって「国王による説教ライセンス llicencies reials per predicar」と名付けられたこの権限は、時に集合的なものとして、特にドミニコ会やフランシスコ会の成員に与えられた。ラモン・リュイに1299年に与えられたもののように、個別の伝道師に与えられるものもあった。J. Riera i Sans, "Les llicencies reials per predicar als jueus i als sarrains (Segles XIII-XIV)", *Calls*, 2 (1987), pp. 114-131を参照。

27 E. Colomer による , *Gran Enciclopedia Catalana*, Barcelona, 1982年版及びその後の版の 9 巻643ページに記載されている Ramon Martí の項目を参照。コルメルは「反コーランの、失われた幾つかの摘要」をラモン・マルティのものとしている。また、E. Vilanova, *Historia de la teologia cristiana,* I. *Des dels origens al segle XV*, Barcelona, Ed. Herder, 1984. を参照。ビラノバもまた「反コーランの幾つかの摘要」をラモン・マルティに帰している。

28 この問題と、単一の作品か複数の作品かという論争については、J. Hernando, "Le "De Seta Machometi" du Cod. 46 d'Osma, oeuvre de Raymon Martín (Ramon Martí)", *Islam et chretiens du Midi* (*XIIIe-XIVe sicecles*), Cahiers de Fanjeaux 18, Toulouse, 1983, pp. 351-371 を参照。また、J. Hernando, "De nuevo sobre la obra antiislámica atribuida a Ramón Martí, dominico catalán del siglo XIII", *Sharaq al-Andalus*, 8 (1991), pp. 97-108も参照。

29 *Espansione del Francescanesimo tra occidente e oriente nel secolo XIII* (*Atti del VI Convegno Internazionale. Assisi, 12-14 ottobre 1978*), Assisi, Societa Internazionale di Studi Francescani 1979を参照。特に、F. Gabrieli, "San Francesco e l'Oriente Islámico", pp. 105-122 および L. Petech, "I francescani nell' Assia Centrale e Orientale nel XIII e XIV secolo", pp. 213-240.

30 J. Perarnau i Espelt, "La copia manuscrita medieval de les tres lletres de Ramon Llull demanant al Rei, a un Prelat de Franca i a l'Estudi de Paris l'establiment d'escoles de llengues (Clermont-Ferrand. BMI, Ms. 96)", *Arxiu de Textos Catalans Antics*, 21 (2002), pp. 123-218を参照。

31 A. Madre 版は *Corpus christianorum, Continuatio mediaevalis* のコレクション、114巻に収められている , *Raimundi Lulli Opera Latina* (ROL) XXII, Turnholt, 1998.

32 S. Garcías Palou, *Ramon Llull y el Islam*, Palma de Mallorca, 1981; F. Ben Hamamouche, "Ramon Llull y el mundo islámico. Una relación apasionada", *Revue d'histoire maghrebine*, 22 (1995), pp. 113-182を参照。

33 ジローラモ・ゴルボヴィッチ Girolamo Golubovich 監修による訳は、*Biblioteca bio-bibliografica della Terra santa e dell' Oriente Francescano*, II (1913), p. 1-60.

34 また、P. Evangelisti, "Il 'Liber recuperationis Terre Sancte' di Fidenzio da Padova: un progetto egemonico francesano per il ricupero ed il governo della Terrasanta", *Acri 1291*, pp. 143-170; P. Evangelisti, "Fidenzio da Padova e la letteratura crociato-missionaria minoritica: strategie e modelli francescani per il dominio (XIII-XIV sec.)", *Istituto Italiano per gli Studi Storici in Napoli*, 43 (Bologna, 1998); P. Evangelisti, "Francescani e la costruzione di uno Stato. Linguaggi politici, valori identitari, progetti di governo in area catalano-aragonese", *Fonte e ricerche*, 20, (Padua, Editrici Francescane, 2006) を参照。

35 MIGNE, *PL*. 104, cols. 1037-1042を参照。

36 T.F. O' Meara, "The theology and times of William of Tripoli, O.P.: a different view of Islam",

Theological Studies, 69 (2008), pp. 80-98.

37 ペラ3世の時代、1382年に、フランセスク・ポンス・サクロタ Francesc Ponç Saclota がコーランをカタルーニャ語に翻訳した。1384年頃には、ペルピニャンに異なる版も存在したようである。しかし、どちらの版も伝来していない。A. Rubió i Lluch, *Documents per la Història de la cultura catalana mig-eval*, Barcelona, Institut d'Estudis Catalans, 1908 (facsímil: 2000) を参照。

38 D. Cabanelas Rodríguez, *Juan de Segovia y el problema islámico*, Madrid, Ed. Maestre, 1952を参照。

39 ファクシミリ版が、アリカンテのミゲル・デ・セルバンテス・ヴァーチャル図書館 Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes によって2004年に刊行されている。

40 I. Adeva, "Juan de Torquemada y su *Tractatus contra principales errores perfidi Machometi et turcorum sive saracenorum* (1459)", *Anuario de Historia de la Iglesia*, 16 (2007), pp. 195-208を参照。

41 またピウス2世も、スルタンのメフメット2世に宛てた、送られることのなかった有名な書簡において引用している。F. Gaeta, "Sulla Lettera a Mahometto di Pio II", *Bulletino dell'Istituto Storico Italiano per il Medio Evo e Archivo Muratoniano*, 77 (1965), pp. 163-167を参照。

42 N. de Cusa, *Opera Omnia. VIII Cribatio Alcorani, Edidit commentariisque illustravit Ludovicus Hagemann*, Aedibus Felicis Meiner: Hamburg, 1967を参照。